Folia orbicularia vel ovato-elliptica, 3—6 cm lata, basi rotundata, truncata vel subcuneata.

Nom. Jap. Tokuwakasō.

Hab. Honshū: in monte Iide, prov. Iwashiro (G. Nakahara, anno 1903); in monte Komagatake, prov. Echigo (B. Hayata, anno 1903); in monte Tanigawa, prov, Kōzuke (T. Yamazaki, anno 1944); ibidem (M. Takeuchi, anno 1948); ibidem (H. Ono, anno 1948); Kurobe, prov. Ecchū (M. HONDA, anno 1927—typus in Herb. Univ. Tokyo.); ibidem (K. Shinno, no. 5, anno 1932); in monte Tateyama, prov. Ecchū (M. Hashimoto, anno 1936); in monte. Hōtatsu, prov. Noto (T. Sawada, anno 1923).

本草図譜巻之十七にトクワカソウとして越後産のものが図解されているが，恐らくこの型のものを指したものと思われる。

以上の私の観察とほぼ同様な観察記事を檜山庫三氏が既に昭和 18 年の「野草」に発表しておられることを後で気がついて汗顔の至りである。従つてオオイワウチワの命名者を檜山氏に置換えたなどは後からの処置であつて，最初は筆者自らのつもりであつた。なお昨年の夏，加賀の白山に登つた時，北側の岩間温泉から尾添に向かつて下る途中でも北陸型のトクワカソウを見た。

○ツクシマムシグサ （原 寛） Hiroshi HARA: *Arisaema Maximowiczii* Nakai

東亜植物図説 **1** (3): t. 22 a—c (1936) に前川文夫博士が図解された志摩産のテンナンショウの 1 種は，葉が通常 1 枚で偽花梗は短く，仏燄苞には著しい白い縦縞があり，その苞片は下部が 3 角状卵形で中央部は半透明な灰白色を呈し，先端は急に細まり長い嘴状をなして初めから直立している点が特に顕著で，肉穂花序の附属体は細い。これは後に中井博士によりシママムシソウ *A. simense* Nakai (1936) と名付けられた。中井博士はこれに近似の北九州産のものをナガハシマムシソウ *A. angustifoliatum* Nakai (1937) として発表され，又同じく九州産のものを本雑誌 **15**: 414 (1939) にシママムシソウの新変種として記載された。しかしこの植物はそれより約 10 年前に**ツクシマムシグサ A. Maximowiczii** Nakai in Bot. Mag. Tokyo **42**: 454 (1928) と命名発表されている。これは Maximowicz が 1863 年九州九重山で採集した標本に基いて書かれたもので，その複標本を私は 1939 年に見て写真をとつてきた。本種は今のところ紀伊半島と北九州の山地から知られているが，今後その中間地帯からも見出されるかもしれない。今 (4 月末) 私の庭で肥前多良岳から採つてきたものがその特徴のある苞片を立てている。